

出雲国造神賀詞奏上儀礼の変容とその後

國學院大學大学院文学研究科 特別研究生 中山さら

出雲国造神賀詞の国史上の記事等をもとに、儀礼の変容とその後について考察した。

出雲国造神賀詞は、養老四年（七二〇）成立の『日本書紀』と同時代である靈龜二年（七一六）から開始されたと考えられ、天長十年（八三三）まで国史上に記される儀礼である。神賀詞の奏上に関連する記事は『続日本紀』『類聚国史』『日本後紀』『続日本後紀』にみることが出来る。

『延喜式』巻八祝詞の詞章は『日本書紀』巻二第九段一書第二にある大物主神が皇孫を護るという概念と共通しており『日本書紀』において語られる神話と出雲国造神賀詞のなかで語られる神話には、共通点が存在することを確認した。

国史上すべての奏上記事等から、出雲国造神賀詞奏上儀礼の変容は宝龜・延暦年間であることを結論とし、即位した天皇が国造を任命するという形式の変化が存在する可能性を述べた上で、八世紀は二月に行われていた儀礼が九世紀には一月ではなくなる等を指摘した。また、中臣氏・忌部氏が関わる天皇の即位儀礼にも注目。『続日本紀』『日本後紀』『古語拾遺』等から中臣氏・忌部氏の状況を確認した。『日本書紀』巻一第七段の神話で活躍が語られる祭祀氏族忌部氏の状況と連動するように出雲国造神賀詞は変容し、その後国史上から姿を消すのである。